

博士論文（要約）

論文題目 「故郷」の表象
—日本統治期における台湾美術の研究—

氏 名 邱 函 妮

目次

序章

第一節 研究史と本論の方針

第二節 本論の構成

註

第一章 台湾における「美術」概念と制度の成立

はじめに

第一節 台湾美術展覧会と「美術」概念・制度の移植

第二節 「植民地的近代」のジレンマ―黄土水为例として―

第三節 独自性への追求―「台湾美術」という概念と枠組みの成立―

おわりに

註

第二章 近代台湾美術における「地方色（ローカル・カラー）」と郷土芸術

はじめに

第一節 先行研究と本稿の方針―「地方色（ローカル・カラー）」について―

第二節 近代日本美術における「地方色」―「生の芸術」論争―

7

8

16

20

25

26

26

30

36

40

42

47

48

49

56

第三節 台展における「地方色」をめぐる言説とその諸相―総督府・日本人審査員・評論界―……………64

第四節 郷土芸術と地方色（ローカル・カラー）……………78

おわりに……………84

註……………88

第三章

官展の出品作品に見る「台湾的」主題……………97

―黄土水、郭雪湖、陳植棋の作品を例として―……………97

はじめに……………98

第一節 フォルモサ芸術の創造―西洋画団体・赤島社―……………99

第二節 「故郷」の発見―黄土水の《水牛シリーズ》（一九三〇年）―……………101

第三節 屈折した自己表現―郭雪湖《南街殷賑》（一九三〇年）の二重の意味―……………109

第四節 隠喩の殿堂―陳植棋の《台湾総督府》（一九二四年）と《真人廟》（一九三〇年）―……………119

おわりに……………127

註……………130

第四章

ポスト印象派と近代台湾における芸術家意識の形成……………137

―陳澄波と陳植棋を例として―……………137

はじめに……………138

第一節 自画像……………139

第二節 近代日本と台湾におけるポスト印象派の受容と「自己表現」……………146

第三節 「写実」と「表現」	150
第四節 陳植棋の絵画作品における「表現」とポスト印象派の画風	155
第五節 陳澄波の絵画様式における多重の文化要素	159
おわりに	171
註	173

第五章

陳澄波の絵画に見られる「故郷」意識とアイデンティティ

— 《嘉義の町はずれ》（一九二六年）、《街頭の夏気分》（一九二七年）、
《嘉義公園》（一九三七年）を中心として —

はじめに	180
第一節 「故郷」の表象—本論の方針—	183
第二節 自画像としての風景—《嘉義の町はずれ》（一九二六年）、《街頭の夏気分》（一九二七年）—	186
第三節 陳澄波の「故郷」意識と想像の共同体「台湾」の成立	194
第四節 主体性を求める理想の「故郷」風景—《嘉義公園》（一九三七年）を中心に—	198
第一項 《嘉義公園》の画面構成	198
第二項 陳澄波の「東洋」アイデンティティとその転化	203
第三項 《嘉義公園》の意味構造—多重の文化要素を融合した主体性—	218
おわりに	223
註	226

結論	239
----	-----

註	247
---	-----

初出一覽	248
------	-----

資料・参考文献表	251
----------	-----

I 資料	253
------	-----

II 参考文献	262
---------	-----

図版	277
----	-----

図版一覽	393
------	-----

本文

- ・本論文は五年以内に出版が予定されているため、全文を公表できない。
- ・また、画像掲載の許可が得られない箇所があるため、非公開とする。
- ・本論文の第五章「陳澄波の絵画に見られる『故郷』意識とアイデンティティ」は、『美術史論叢』(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室紀要、二〇一六年三月、)に掲載される予定である。

初出一覧

左記の各章は、旧稿を和訳し、加筆訂正を加えたものである。

第一章

- ・「創造福爾摩沙藝術—近代台灣美術中『地方色』與郷土藝術的重層論述（フオルモサ藝術の創造—近代台灣美術における「地方色」と郷土藝術に関して）」『國立台灣大學美術史研究集刊』第三七期（二〇一四年九月）、一二三—一二六頁。

第二章

- ・「地方色（ローカルカラー）論再考—以陳植棋《真人廟》（一九三〇年）、郭雪湖《南街殷賑》（一九三〇年）為例（「地方色（ローカルカラー）」論の再考—陳植棋《真人廟》（一九三〇年）、郭雪湖《南街殷賑》（一九三〇年）を例として）、異地與家郷—東亞美術史的伏流與激盪（一九二〇—一九四〇（異境と家郷—東アジア美術史の中の底流と乱流 一九二〇—一九四〇）国際シンポジウム口頭発表（台北、台湾大学芸術史研究所 二〇一三年）
- ・前掲「創造福爾摩沙藝術」

第三章

- ・「近代台灣美術における故郷—黄土水と陳澄波の作品を中心に」『鹿島美術研究』年報第二七号別冊（二〇一〇年）、一五七—一六九頁。
- ・“Urban Images and Modernity in Modern Taiwanese Art”, *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* (国際東方学会會議紀要) No.LIII2008 (第53冊), 2009.1, pp.44-65.

- ・前掲「地方色（ローカルカラー）論再考」

- ・前掲「創造福爾摩沙藝術」

第四章

- ・「後期印象派與近代台灣『藝術家認同』之形成—陳澄波與陳植棋為例（ポスト印象派と近代台灣における藝術家意識の形成—陳澄波と陳植棋を例として）」波瀾中的典範—陳澄波暨東亞近代美術史（波瀾の中の模範—陳澄波及び東アジア近代美術）国際シンポジウム口頭発表、台北、国立故宫博物院、二〇一五）

第五章

- ・「近代台湾美術における故郷―黄土水と陳澄波の作品を中心に」『鹿島美術研究』年報第二七号別冊（二〇一〇年）、一五七―一六九頁。
- ・「陳澄波嘉義圖像初探（陳澄波作品における嘉義圖像に関する一考察）」『檔案・顯像・新「視」界―陳澄波文物資料特展暨學術論壇論文集（陳澄波関連文物・文献資料展シンポジウム論文集）』（嘉義市政府文化局、二〇一一年）、一〇三―一一八頁。
- ・「陳澄波繪畫中的故郷意識與認同―以《嘉義街外》（一九二六）、《夏日街景》（一九二七）、《嘉義公園》（一九三七）為中心（陳澄波の絵画に見られる「故郷」意識とアイデンティティ―《嘉義の町はずれ》（一九二六年）、《街頭の夏気分》（一九二七年）、《嘉義公園》（一九三七年）を中心として）」『國立台灣大學美術史研究集刊』第三三期（二〇一二年九月）、二七一―三四二頁。

資料・参考文献表

凡例

＊本表は、本論文で引用及び参照した文献のみを列挙した。

＊文献表は以下のような構成した。

I 資料

一、単行本ならびに単行本収録論文

二、雑誌記事

三、新聞記事

II 参考文献

(一) 和文

一、単行本

二、展覧会図録

三、雑誌・単行本・展覧会図録等収録論文

(二) 中文

一、単行本

二、展覧会図録

三、雑誌・単行本・論文集等収録論文

＊ここでの資料とは、本論文が考察の対象とした日本統治期、一八九五～一九四五年前後に発表された文献を指す。参考文献は、主に現代の研究書、研究論文、展覧会図録を指す。

＊何れの項目も、和文は五十音順、中文はウェード式 (Wade-Giles) 表記順、同一執筆者は年代順に記した。

＊台湾で出版された引用文献の表記については、中国語繁体字をそのまま使用した。

I 資料

一 単行本ならびに単行本収録論文

- ・郁達夫「十三夜」、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社聯合編輯『郁達夫文集（第二卷）』（香港：生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八二年）。
- ・石井柏亭、黒田鵬心、結城素明編著『美術辞典』（東京：日本美術学院、一九一四年）。
- ・尾崎秀真「清朝時代の台湾文化」『続台湾文化史説』（台南：台湾文化三百年記念会、一九三一年）。
- ・小出檣重「油絵新技法」『小出檣重隨筆集』（東京：岩波書店、一九八七年）。
- ・新宮市立佐藤春夫記念館編『佐藤春夫宛森丑之助書簡』（和歌山：新宮市立佐藤春夫記念館、二〇〇三年）。
- ・高村光太郎「印象主義の思想と芸術」『高村光太郎全集 第四卷』（東京：筑摩書房、一九九五年）。
- ・張麗俊「登十層樓二絶」『水竹居主人日記』第四冊（台北：中央研究院近代史研究所、二〇〇一年）。
- ・山崎坤象「美校回想―ドモ又の死」、芸術研究振興財団、東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京藝術大学百年史 東京美術学校編』第三卷（東京：ぎょうせい、一九九七年）。

二 雑誌記事

- ・「一夕話―文部省展覧会の西洋画及彫刻に就て」『スバル』（一九〇九年十一月）。
- ・「槐樹社展覧会合評」『美術新論』二巻五号（一九二七年五月）。
- ・「槐樹社展覧会合評雑誌」『美術新論』四巻四号（一九二九年四月）。
- ・「郷土色に乏しい帝展の模倣第十回台展を見る」『台湾公論』一巻一一号（一九三六年十一月）。

- ・「台湾議會設置請願歌」『台灣』第四年第三号（一九二三年三月）。
- ・「台湾美術展覽会第八回評価」『台灣』（一九三四年十一月）。
- ・「第四回槐樹社展覽会陳列目錄」『美術新論』二卷五号（一九二七年五月）。
- ・「第五回槐樹社展覽会陳列目錄」『美術新論』三卷三号（一九二八年三月）。
- ・「第六回槐樹社展覽会陳列目錄」『美術新論』四卷四号（一九二九年四月）。
- ・「第四回台展を見て―東洋画 勝田委員談」『台灣教育』三四〇号（一九三〇年十一月）。
- ・「第四回台展を見て―西洋画 南委員談」『台灣教育』三四〇号（一九三〇年十一月）。
- ・「バーナード・リーチ氏の談話」『方寸』三卷九号（一九〇九年十二月）。
- ・N生「第六回台湾美術展を見る」『台灣教育』三六四号（一九三二年十一月）。
- ・新井英夫「台湾に於ける国民美術の課題」『台灣時報』二二四号（一九三七年九月）。
- ・石井柏亭「方寸書架」『方寸』四卷二号（一九一〇年二月）。
- ・石川欽一郎「麗島餘録」『台灣時報』八〇号（一九二六年七月）。
- ・石川欽一郎「東西閑話」『台灣時報』八六号（一九二七年一月）。
- ・石黒英彦「台湾美術展覽会に就いて」『台灣時報』九〇号（一九二七年五月）。
- ・井手薫「郷土」『趣味の台湾』一号（一九三三年十月）。
- ・槐樹社同人「槐樹社展覽会入選作合計」『美術新論』三卷三号（一九二八年三月）。
- ・木下靜涯「台展の日本画に就いて」『東方美術』（一九三九年十月）。
- ・木下李太郎「画界近事」『中央公論』第二十六年六号（一九一一年五月）。
- ・黄土水「台湾に生れて」『東洋』二五：二／三（一九二三年三月）。顏娟英訳著、鶴田武良訳『風景、心境―台湾近代美術文獻導讀（下）』（台北：雄獅圖書、二〇〇一年）。
- ・郷原古統「台湾美術十周年所感」『台灣時報』二〇三号（一九三六年十月）。

- ・郷原藤一郎(古統) 「台湾の書画に就て」 『台湾教育』三七四号(一九三三年九月)。
- ・河野桐谷「最近画界の一瞥」 『早稲田文学』(一九二二年十月)。
- ・塩月桃甫「台展洋画概評」 『台湾時報』九六号(一九二七年十一月)。
- ・塩月善吉(桃甫) 「台湾美術展物語」 『台湾時報』一六八号(一九三三年十一月)。
- ・塩月善吉(桃甫) 「第八回台展の前に」 『台湾教育』三八八号(一九三四年十一月)。
- ・塩月桃甫「台湾に於ける洋画の発達」 『東方美術』四(一九三九年十月)。
- ・台湾総督府「台湾美術展覧会開催の趣旨」 『台湾時報』九〇号(一九二七年五月)。
- ・台湾総督府「台湾美術展開催の意義」 『東方美術』四(一九三九年十月)。
- ・立石鐵臣「美術常設館の設立其の他」 『台湾教育』三八八号(一九三四年十一月)。
- ・立石鐵臣「台湾美術論」 『台湾時報』二七三号(一九四二年九月)。
- ・溪歸逸路「再び台湾の画壇を語る」 『台湾時報』一九四号(一九三六年一月)。
- ・張澤厚「美展之繪畫概評」 『美展』第九期(一九二九年五月四日)。
- ・陳澄波「日據時代台灣藝術之回顧」 『雄獅美術』一〇六期(一九七九年十二月)。
- ・陳鶴子「兄の画生活を想ふ」 『台湾文芸』(一九三五年一月)。
- ・高村光太郎「ABHOC ET AB HAC」 『スバル』(一九一〇年二月)。
- ・高村光太郎「緑色の太陽」 『スバル』(一九一〇年四月)。
- ・永山義孝「台展雜感」 『台湾教育』三七六号(一九三三年十一月)。
- ・藤島武二「洋畫家の日本畫觀(其一) 根底と進歩」 『美術新報』一〇卷一十一号(一九二一年九月)。
- ・松林桂月「第二回台湾美術展覧会審査所感東洋画に就て」 『台湾教育』三二八号(一九二八年十一月)。
- ・松林桂月「第三回台湾美術展覧会に就いての感想東洋画」 『台湾教育』三二九号(一九二九年十二月)。
- ・松林桂月「台展審査に就ての感想 昭和四年十一月十三日台日樓上に於て」 『台湾教育』三二九号(一九二九年十二月)。

- ・松林桂月「台湾」『東方美術』四（一九三九年十月）。
- ・武者小路実篤「六号雑感―自己の為の芸術」『白樺』第二卷一号（一九一一年十一月）。
- ・武者小路実篤「『自己の為』及び其他について『公衆と予と』を見て李太郎君に」『白樺』第三卷二号（一九一二年十二月）。
- ・柳宗悦「革命の画家」『白樺』三卷一号（一九一二年一月）。
- ・柳宗悦「神と吾々との關係に就て」『白樺』一四卷四号（一九二三年四月）。
- ・山脇信徳「断片」『白樺』第二卷九号（一九一一年九月）。
- ・萬鉄五郎「玉堂琴士の事及び餘談」『純正美術』二卷七号（一九二二年七月）。
- ・藍植夫「島都名所図会」『台湾遞信協会雜誌』一三四期（一九三三年三月）。
- ・リュキス・ハインド著、木村莊八訳「後期印象派論」『現代の洋画』一七号（一九一三年）。

三 新聞記事

- ・「アトリエ巡り（十）―裸婦を描く」『台湾新民報』、一九三二年。
- ・「アトリエ巡り―タッチの中に線を秘めて描く 帝展を目指す芸術的に表現する 陳澄波」『台湾新民報』、一九三四年。
- ・「アトリエ巡り（十三）―阿里山の神秘を芸術的に表現する」『台湾新民報』、一九三五年。
- ・「意外に立派―藤島武二画伯の西洋画審査感想」『台湾日日新報』、一九三三年十月二五日、夕刊第二面。
- ・「今秋の帝展出品の水牛を製作しつつ―本島彫塑界の偉才黄土水氏」『台湾日日新報』、一九二三年八月二七日、第五面。
- ・「孟蘭盆と中元」『台湾日日新報』、一九一二年七月十四日、第七面。
- ・「永楽座活写」『台湾日日新報』、一九三〇年二月十三日、漢文第四面。
- ・「驚くべき一般技巧の進歩 郷土に取材するものが多い 東洋画松林審査主任の談」『台湾日日新報』、一九三四年十月二三日、第四面。

- ・「家屋の新築―城内の面目一新せん」『台湾日日新報』、一九一一年十月二十四日、第七面。
- ・「嘉義公園の辨天堂改修成る」『台湾日日新報』、一九二八年十二月十三日、第五面。
- ・「基隆慶安宮放河灯」『台湾日日新報』、一九二九年八月三十一日、第四面。
- ・「旧中元祭典中新旧人各有所主張、為文化与經濟不合」『台湾日日新報』、一九二九年八月二十日、第四面。
- ・「芸術写真を台展の一科に」『台湾日日新報』、一九三一年六月五日、夕刊第五面。
- ・「故黄土水氏南国傑作寄附公会堂」『台湾日日新報』、一九三六年十二月三十日、漢文第四面。
- ・「紅蓮寺続映」『台湾日日新報』、一九三〇年二月二十日、漢文第四面。
- ・「黄土水氏の遺作『南国』台北市公会堂に寄付 未亡人の好意で壁面へ掲ぐ」『台湾日日新報』、一九三六年十二月二十九日、第七面。
- ・「質の向上を認む 審査を終へて各委員語る」『台湾日日新報』、一九三五年十月二三日、第一一面。
- ・「新華藝大聘兩少年畫家」『申報』、一九二九年八月二六日、第七面。
- ・「人事欄」『台湾日日新報』、一九二九年二月十二日、漢文第四面。
- ・「水上瓢之演戲」『台湾日日新報』、一九二五年五月二十日、第五面。
- ・「赤島社美術展―本島人洋畫家蹴起 本月三十一日来月一三兩日開於台北博物館」『台湾日日新報』、一九二九年八月二十九日、第四面。
- ・「赤島社美術展」『台湾日日新報』、一九二九年八月二十九日、夕刊第四面。
- ・「赤島社洋畫展覽本日起開於台北博物館 多努力傑作進步顯著」『台湾日日新報』、一九二九年八月三十一日、漢文第四面。
- ・「赤島社の画展と郷土芸術」『台湾日日新報』、一九三〇年五月十四日、第八面。
- ・「赤島社の進出 台湾芸術を創り出す爲に 島民は熱烈な後援と適切な援助を與へよ」『台湾民報』、一九三〇年十一月十日、第一面。
- ・「台展アトリエ巡り(三)―色とりどりに、異国情緒漂ふ 花鳥画Ⅱ郷原藤一郎氏」『台湾日日新報』、一九二七年九月八日、第一面。

第七面。

・「台展を権威づけるため 内地から審査員を日本画洋画各一名 けふうの関係者会議で決定」『台湾日日新報』、一九二八年八月二一日、第七面。

・「台展出品者招待茶話会 きのお鉄道ホテルに開催 松林沢村両氏から適切な講話」『台湾日日新報』、一九二八年十月二七日、第七面。

・「台展の洋画を観て、その進歩は寧ろ意外」『台湾日日新報』、一九二九年十一月二六日、第五面。

・「台展優秀画家 贈台日賞」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二三日、夕刊第四面。

・「台展正統とローカルカラー 特選、台展賞、台日賞選定された事情（郷原審査員談、石川審査員談）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二八日、第一面。

・「台展と郷土芸術への進境」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二八日、第二面。

・「台展で今度会友を委嘱 台湾美術界のため尚一層努力する」『台湾日日新報』、一九三三年十月三一日、第十一面。

・「台湾美術雑誌発刊」『台湾日日新報』、一九二〇年十月二十日、第七面。

・「台湾美術社第一回展覧会」『台湾日日新報』、一九二〇年十二月十八日、第七面。

・「台湾の芸術は支那文化の延長と模倣と痛嘆する黄土水氏 帝展への出品『水牛』を製作中」『台湾日日新報』、一九二三年七月十七日、第七面。

・「台湾美展自今年起 授起台展賞 対善發揮本島之特色者」『台湾日日新報』、一九三〇年十月十二日、夕刊第四面。

・「台湾教育会館挙盛大落成式太田総督臨場」『台湾日日新報』、一九三二年五月三一日、第四面。

・「台湾と芸術良心の問題 台展を前に有りの儘を言ふ」『台湾日日新報』、一九三二年七月九日、第二面。

・「台湾一の高い塔—総督府の『阿呆塔』 シルクハットを冠つた庁舎」『台湾日日新報』、一九三一年七月十七日、第七面。

・「台湾美術展委囑会友為美術界努力」『台湾日日新報』、一九三三年十一月一日、夕刊第四面。

・「台湾色 豊かな優秀作品へ！台展台日賞の使命」『台湾日日新報』、一九三三年十月三一日、第四面。

- ・「第三回台展画の審査成る 新郷土芸術の創造如何」『台湾日日新報』、一九二九年十一月十三日、第二面。
- ・「第三回台展之我観（中）」『台湾日日新報』、一九二九年十一月十七日、漢文第四面。
- ・「第二回聖德太子奉讃美術展覽会入選」『台湾日日新報』、一九三〇年四月十二日、夕刊第四面。
- ・「中元大売出しに各商店は大馬力」『台湾日日新報』、一九二九年七月十二日、第二面。
- ・「中元贈答」『台湾日日新報』、一九二五年七月十日、第一面。
- ・「彫刻『蕃童』が帝展入選する迄―黄土水君の奮闘と其苦心談（上）」『台湾日日新報』、一九二〇年十月十七日、第七面。
- ・「彫刻『蕃童』が帝展入選する迄―黄土水君の奮闘と其苦心談（下）」『台湾日日新報』、一九二〇年十月十九日、第七面。
- ・「二度目の入選は初入選より苦勞―入選と聞いた時は夢のやう、陳澄波君大喜び」『台湾日日新報』、一九二七年十月十五日、第五面。
- ・「入選の喜び―台湾の陳君」『報知新聞』、一九二六年十月十一日。
- ・「熱帯的な画風の創成に寄与 台展東洋画審査員結城素明氏語る」『台湾日日新報』、一九三二年十月十六日、第二面。
- ・「萬華龍山寺慶讃中元」『台湾日日新報』、一九二六年八月十八日、第四面。
- ・「美術団体『赤島社』生る」『台湾日日新報』、一九二九年八月二八日、第七面。
- ・「風景静物が多い 地方色が濃い 精選したから目障りがない 西洋画藤島審査主任の談」『台湾日日新報』、一九三四年十月二三日、第四面。
- ・「廟宇廢墜」『台湾日日新報』、一九〇八年一月五日、漢文第五面。
- ・「辨天堂落成式」『台湾日日新報』、一九一三年五月十六日、第四面。
- ・「辨天池（台陽展）陳澄波画」『台湾日日新報』、一九三八年五月十一日、第十面。
- ・「本町中元大売出しの投票抽籤発表」『台湾日日新報』、一九三一年七月十日、第二面。
- ・「難かしい動物の彫刻に今年も精を出してゐる 本島出身の黄土水君」『台湾日日新報』、一九二四年八月十六日、第五面。
- ・「豫期以上の好成績 審査を終へて各委員語る」『台湾日日新報』、一九三六年十月十九日、第七面。

- ・「龍口町教育会館内外部工事告竣 来廿九日挙開館披露式」『台湾日日新報』、一九三二年五月二六日、夕刊第四面。
- ・N生記「台展を観る（一）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二五日、第六面。
- ・N生記「台展を観る（二）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二六日、第六面。
- ・N生記「台展を観る（三）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月二七日、夕刊第六面。
- ・N生記「台展を観る（四）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月三十日、第六面。
- ・N生記「台展を観る（五）」『台湾日日新報』、一九三〇年十月三十一日、第六面。
- ・XYZ生「一巡りして」『台湾日日新報』、一九二九年十一月十三日、第二面。
- ・XYZ生「台展評―習作展の観ある西洋画 但し模倣作は尠くなった（二）」『台湾日日新報』、一九三二年十一月一日、第六面。
- ・XYZ「台展評：来年を一期待する人々 習作域を脱した時（三）」『台湾日日新報』、一九三一年十一月二日、第六面。
- ・愛美生「台展の鑑査」『台湾日日新報』、一九三一年十月二九日、第三面。
- ・新井英夫「朗かに喇叭が鳴る 台展をめぐりて（上）台展の純粹性」『台湾日日新報』、一九三五年十月二十日、第七面。
- ・新井英夫「朗かに喇叭が鳴る 台展をめぐりて（下）趣味の問題」『台湾日日新報』、一九三五年十月二二日、第七面。
- ・石川欽一郎「台北の建築物（上）」『台湾日日新報』、一九二五年四月十二日、第三面。
- ・石川欽一郎「台北の建築物（下）」『台湾日日新報』、一九二五年四月十三日、夕刊第三面。
- ・石川欽一郎「台展漫語」『台湾日日新報』、一九二七年九月十四日、夕刊版第二面。
- ・石川欽一郎「台湾の羅馬」『台湾日日新報』、一九二七年十月十八日、二十日、二二日、二三日、二五日、夕刊第一面。
- ・石黒英彦「台展作家に寄する言葉」『台湾日日新報』、一九二八年八月二八日、第五面。
- ・尾崎秀真「書道の世界（上）全国書道展を見て」『台湾日日新報』、一九三六年九月二七日、第四面。
- ・鷗亭生「台展評 西洋画部四」『台湾日日新報』、一九二七年十一月二日、第五面。
- ・鷗亭生「新台湾の郷土芸術―赤島社展覧会を観る」『台湾日日新報』、一九二九年九月一日、第五面。

- ・ 鷗亭生「台展の印象（二）小澤、塩月兩君の作」『台湾日日新報』、一九三二年十月二七日、第六面。
- ・ 鷗亭生「台展の印象（五）東洋画の進歩と特色」『台湾日日新報』、一九三二年十一月二日、第六面。
- ・ 岡山実「第九回台展の洋画を觀る全体として質が向上した」『台湾日日新報』、一九三五年十一月二日、第三面。
- ・ 栗原信「美術に見る動向台展を見て想ふ事一二」『台湾日日新報』、一九三三年十一月十四日、第六面。
- ・ 塩月善吉「本島の芸術と作家の態度 一画家の立場から 塩月善吉氏の寄稿」『台湾日日新報』、一九三一年七月十八日、第六面。
- ・ 塩月桃甫「台展鑑査への僻見に答ふ」『台湾日日新報』、一九三二年十月三十一日、第四面。
- ・ 塩月桃甫「台展と明朗性」『台湾日日新報』、一九三五年七月二五日、第三面。
- ・ 自得居士「新春希望問題（其六）論台湾芸術宜革新」『台湾日日新報』、一九二〇年一月十八日、第三面。
- ・ 蕭金鑽「故陳植棋君の追憶（上）、（下）」『台湾新民報』、一九三四年十月十九日、二十日。
- ・ 陳植棋「本島美術家に與へる」『台湾日日新報』、一九二八年九月十二日、第三面。
- ・ 陳澄波「美術シーズン 作家訪問記（十）——陳澄波の巻」『台湾新民報』、一九三〇年十月十九日。
- ・ 永山生「本年の台展 洋画部は書生ツポ 目立つ四グループ 四」『台湾日日新報』、一九三三年十一月二日、第二面。
- ・ 永山義孝「赫熱せる感情——東都に於ける立石鉄臣氏の個展」『台湾日日新報』、一九三六年十月一日、第四面。
- ・ 蜂谷生「繪の旅より（下）」『台湾日日新報』、一九一七年三月八日、第四面。
- ・ 宮武辰夫「台展そぞろ歩き 西洋画を見る」『台湾日日新報』、一九三六年十月二九日、第四面。
- ・ 錦鴻生（林錦鴻）「昭和十一年度の台湾美術界に対する希望 官民の一致協力を期待」『台湾新民報』、一九三六年一月八日。

Ⅱ 参考文献

(一) 和文

一 単行本

- ・秋山聰『デューラーと名声―芸術家のイメージの形成』（東京：中央公論美術出版、二〇〇一年）。
- ・岩城見一編著『芸術／葛藤の現場―近代日本芸術思想のコンテクスト』（京都：晃洋書房、二〇〇二年）。
- ・大久保純一『広重と浮世絵風景画』（東京：東京大学出版会、二〇〇七年）。
- ・五十殿利治『大正期の新興美術の研究』（東京：スカイドア、一九九八年）。
- ・五十殿利治、菊屋吉生、滝沢恭司、長門佐季、野崎たみ子、水沢勉著『大正期新興美術資料集成』（東京：国書刊行会、二〇〇六年）。
- ・五十殿利治編『「帝国」と美術―一九三〇年代日本の対外美術戦略』（東京：国書刊行会、二〇一〇年）。
- ・河北倫明、高階秀爾『近代日本絵画史』（東京：中央公論社、一九八七年）。
- ・匠秀夫『原色現代日本の美術第六巻 大正の個性派』（東京：小学館、一九七八年）。
- ・北澤憲昭『岸田劉生と大正アヴァンギャルド』（東京：岩波書店、一九九三年）。
- ・北澤憲昭『境界の美術史―「美術」形成史ノート』（東京：株式会社ブリュッケ、二〇〇〇年）。
- ・北澤憲昭『眼の神殿―「美術」受容史ノート』（東京：株式会社ブリュッケ、二〇一〇年）。
- ・北澤憲昭、佐藤道信、森仁史編『美術の日本近現代史―制度・言説・造型』（東京：株式会社東京美術、二〇一四年）。
- ・木下長宏『思想史としてのゴッホ―複製受容と想像力』（東京：学芸書林、一九九二年）。

- ・金恵信『韓國近代美術研究―植民地期「朝鮮美術展覽会」にみる異文化支配と文化表象』（東京：ブリュッケ、二〇〇五年）。
- ・芸術研究振興財団、東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京藝術大学百年史 東京美術学校編』第三卷（東京：ぎょうせい、一九九七年）。
- ・黄立芸『呂紀「四季花鳥図 四幅」（東京国立博物館）を中心とする日中花鳥画の比較研究』（東京：東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、二〇一〇年）。
- ・小林忠『原色現代日本の美術 第二卷 日本美術院』（東京：小学館、一九七九年）。
- ・東京文化財研究所編『大正期美術展覽会の研究』（東京：中央公論美術出版、二〇〇五年）。
- ・駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（東京：岩波書店、一九九六年）。
- ・子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか―近代日本のオリエンタリズム』（東京：藤原書店、二〇〇三年）。
- ・子安宣邦『近代の超克』（東京：青土社、二〇〇八年）。
- ・佐藤道信『「日本美術」の誕生―近代日本の「ことば」と戦略』（東京：講談社、一九九六年）。
- ・佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学』（東京：吉川弘文館、一九九九年）。
- ・佐藤道信『美術のアイデンティティー―誰のために、何のために』（東京：吉川弘文館、二〇〇七年）。
- ・辻惟雄、河野元昭、矢部良明『日本美術全集第十五卷 永徳と障壁画 桃山の絵画・工芸Ⅱ』（東京：講談社、一九九一年）。
- ・土居次義『日本美術絵画全集第九卷 狩野永徳／光信』（東京：集英社、一九七七年）。
- ・東京文化財研究所企画情報部編『昭和期美術展覽会の研究―戦前篇』（東京：中央公論美術出版、二〇〇九年）。
- ・中村義一『日本近代美術論争史』（東京：求龍堂、一九八一年）。
- ・中村義一『続日本近代美術論争史』（東京：求龍堂、一九八二年）。
- ・永井隆則『セザンヌ受容の研究』（東京：中央公論美術出版、二〇〇七年）。
- ・成田龍一『「故郷」という物語―都市空間の歴史学』（東京：吉川弘文館、一九九八年）。
- ・西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム―大正日本の中国幻想』（東京：中央公論新社、二〇〇七年）。

- ・西楨偉『中国文人画家の近代―豊子愷の西洋美術受容と日本』（京都：思文閣、二〇〇五年）。
- ・ヘンリー・スミス『広重 名所江戸百景』（東京：岩波書店、二〇〇四年）。
- ・日比嘉高『へ自己表象』の文学史―自分を書く小説の登場―』（東京：翰林書房、二〇〇二年）。
- ・ベネディクト・アンダーソン著・白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』（東京：NTT出版、一九九七年）。

- ・前田愛『都市空間の中の文学』（東京：筑摩書房、一九八三年）。
- ・三浦篤『まなざしのレッスン』（東京：東京大学出版会、二〇〇一年）。
- ・吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究―東京美術学校留学生史料』（東京：ゆまに書房、二〇〇九年）。
- ・李淑珠『「サアムシング Something」を描く―陳澄波（一八九五―一九四七）とその時代』（京都：京都大学博士論文、二〇〇五年二月）。
- ・廖瑾瑗『台湾における近代日本画の研究』（広島：広島大学博士論文、一九九七年）。
- ・若林正文『台湾―変容し躊躇するアイデンティティ』（東京：筑摩書房、二〇〇一年）。

二 展覧会図録

- ・『一九三〇年代上海と魯迅』（東京：町田市立国際版画美術館、一九九四年）。
- ・『石川欽一郎展』（静岡：静岡県立美術館、一九九二年）。
- ・『いま鮮やかに甦る明治―ボン浮世絵コレクション』（東京：慶応義塾図書館、二〇〇八年）。
- ・『小野竹喬―生誕一一〇年・没後二〇年記念展』（東京：毎日新聞社、一九九九年）。
- ・『近代洋画の開拓者―高橋由一』（東京：東京藝術大学大学美術館、京都：京都国立近代美術館、二〇一二年）。
- ・『芸大美術館所蔵名品展』（東京：東京藝術大学大学美術館、一九九九年）。

- ・『極東ロシアのモダニズム一九一八―一九二八―ロシア・アヴァンギャルドと出会った日本』（東京：町田市立国際版画美術館、栃木：宇都宮美術館、北海道：北海道立函館美術館、二〇〇二年）。
- ・『小出櫓重の自画像』（東京：石橋財団ブリヂストン美術館、一九九八年）。
- ・『セザンヌ展』（東京：NHK、NHKプロモーション、東京：東京新聞、一九九九年）。
- ・『セザンヌ主義―父と呼ばれる画家への礼讃』（横浜：横浜美術館、東京：日本テレビ放送網、二〇〇八年）。
- ・『生誕一一〇年岸田劉生展』（東京：東京新聞、二〇〇一年）。
- ・『生誕一二〇周年記念岸田劉生展』（大阪：大阪市立美術館、二〇一一年）。
- ・『高橋由一から黒田清輝の時代へ 油画を読む―解剖された明治の名品たち』（東京：東京藝術大学大学美術館、二〇〇一年）。
- ・『土田麦僊―近代日本画の理想を求めて』（新潟：土田麦僊展実行委員会新聞社、二〇〇九年）。
- ・『東南アジア―近代美術の誕生』（福岡：福岡市美術館ほか、一九九七年）。
- ・『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』（福岡：福岡アジア美術館、東京：府中市美術館、兵庫：兵庫県立美術館、東京：美術館連絡協議会、二〇一四年）。
- ・『熱帯花鳥へのあこがれ―石崎光瑤の作品と出会って』（奈良：松伯美術館、二〇〇七年）。
- ・『東アジア／絵画の近代』（静岡：静岡県立美術館、一九九九年）。
- ・『美術家たちの「南洋群島」』（東京：東京新聞、二〇〇八年）。
- ・『ホノルル美術館所蔵―浮世絵風景画名品展』（東京：国際アート、二〇〇三年）。
- ・『ボストン美術館―華麗なるジャポニスム展』（東京：世田谷美術館、京都：京都市美術館、愛知：名古屋ボストン美術館、二〇一四年）。
- ・『没後一二〇年―ゴッホ展』（東京：国立新美術館、福岡：九州国立博物館、愛知：名古屋市美術館、二〇一〇年）。
- ・『もうひとつの明治美術』（静岡：静岡県立美術館、二〇〇四年）。

- ・『躍動する魂のきらめき―日本の表現主義』（栃木：栃木県立美術館、兵庫：兵庫県立美術館、愛知：名古屋市美術館、岩手：岩手県立美術館、千葉：松戸市教育委員会、二〇〇九年）。
- ・『山脇信徳―日本のモネと呼ばれた男』（高知：高知県立美術館、二〇〇〇年）。
- ・『「洋画」の青春群像―油画の卒業制作と自画像』（東京：東京藝術大学大学美術館、二〇〇二年）。
- ・『ロトチェンコ＋ステパーノワ―ロシア構成主義のまなざし』（東京：東京都庭園美術館、滋賀：滋賀県立近代美術館、栃木：宇都宮美術館、二〇一〇年）。

三 雑誌・単行本・展覧会図録等収録論文

- ・浅野豊美「国際秩序と帝国秩序をめぐる日本帝国再編の構造―共通法の立法過程と法的空間の再定義」、浅野豊美、松田利彦編『植民地帝国日本の法的展開』（東京：信山社、二〇〇四年）。
- ・荒野泰典「近世日本における『東アジア』の『発見』」、貴志泰典、荒野泰典、小風秀雅編『「東アジア」の時代性』（広島：溪水社、二〇〇五年）。
- ・飯野正仁「『満洲美術』年表（付論『満洲美術について』）」、五十殿利治編、前掲『「帝国」と美術―一九三〇年代日本の対外美術戦略』。
- ・江川佳秀「満洲国美術展覧会をめぐる」、東京文化財研究所企画情報部編『昭和期美術展覧会の研究―戦前篇』（中央公論美術出版、二〇〇九年）。
- ・小川裕充「薛稷六鶴図屏風考―正倉院南倉寶物漆櫃に描かれた草木鶴図について」「東洋文化研究所紀要」第一一七冊（一九九二年）。
- ・小川裕充「黄筌六鶴図壁畫とその系譜（上）、（下）―薛稷、黄筌、黄居采から庫倫旗一號遼墓を経て徽宗、趙伯驪、牧谿、王振鵬、浙派、雪舟、狩野派まで」「國華」第一一六五（一九九三年二月）、一二九七号（二〇〇三年十一月）。

- ・五十殿利治「新ロシヤ展と大正期の新興美術」『スラヴ研究』三五号（一九八八年）。
- ・加藤祐三「解説」『飯塚浩二著作集二 東洋史と西洋史とのあいだ 世界史における東洋社会』（東京：平凡社、一九七五）。
- ・鍵岡正謹「山脇信徳―人と作品」、前掲『山脇信徳―日本のモネと呼ばれた男』展覧会図録。
- ・河村章代「東京美術学校の山脇信徳―美校時代日記断片を中心」、前掲『山脇信徳―日本のモネと呼ばれた男』展覧会図録。
- ・顔娟英著、鶴田武良・塚本麿充訳「南国美術の殿堂建造―台湾展物語」、前掲『「帝国」と美術―一九三〇年代日本の対外美術戦略』。
- ・顔娟英「第五章第一節 日本占領下における台湾の美術―一八九五―一九五四年」、前掲『美術の日本近現代史―制度・言説・造型』。
- ・顔娟英「一九一〇年代、台湾の美術活動―植民地官方品味の変遷」、前掲『大正期美術展覧会の研究』。
- ・鬼頭美奈子「上村松篁の画業における熱帯花鳥作品の一考察―上村松篁『燦雨』を中心に」、前掲『熱帯花鳥へのあこがれ―石崎光瑠の作品と出会って』展覧会図録。
- ・北澤憲昭「S/O―日本近代絵画史における『表現主義』の台頭と変質」、前掲『躍動する魂のきらめき―日本の表現主義』展覧会図録。
- ・金英那著、喜多恵美子訳「李仁星の郷土色―民族主義と植民主義」『美術研究』三八八号（二〇〇六年二月）。
- ・児島薫「藤島武二における『西洋』と『東洋』」、河野元昭先生退官記念論文編集委員会編『美術史家大いに笑う―河野元昭先生のための日本美術史論集』（東京：株式会社ブリュッケ、二〇〇六年）。
- ・高彩雯「郁達夫『十三夜』論―台湾画家と西湖伝説の物語」『東方学』一一九号（二〇一〇年）。
- ・駒込武「台湾における『植民地的近代』を考える」『アジア遊学』四八号（二〇〇三年三月）。
- ・佐藤道信「日本美術という制度」『岩波講座近代日本の文化史三 近代知の成立』（東京：岩波書店、二〇〇三年）。
- ・佐藤道信「第二章第一節 美術概念の形成期―一八七〇年―一九〇〇年初頭」、前掲『美術の日本近現代史―制度・言説・造型』。

- ・佐藤康宏「都市とその辺境―岸田劉生『道路と土手と塀（切通之写生）』」、佐藤康宏編『講座日本美術史 三 図像の意味』（東京：東京大学出版会、二〇〇五年六月）。
- ・酒井哲郎「大正期における南画の再評価について―新南画をめぐる―」『宮城県美術館研究紀要』第三号（一九八八年三月）。
- ・鈴木恵可「日本統治期の台湾人彫刻家・黄土水における近代芸術と植民地台湾―台湾原住民像から日本人肖像彫刻まで―」『近代画説』二二二号（二〇一三年）。
- ・泰井良「道路山水について」、前掲『もうひとつの明治美術』展覧会図録。
- ・立花義彰「石川欽一郎―或る明治精神の誕生とその終焉」、前掲『石川欽一郎展』展覧会図録。
- ・立花義彰「石川欽一郎―人と作品（上）、（中）」『静岡県立美術館紀要』七号（一九八八年）、一一号（一九九三年）。
- ・田中淳「後期印象派・考―一九二二年前後を中心に（上）」『美術研究』三六八号（一九九七年十二月）。
- ・田中淳「後期印象派・考―一九二二年前後を中心に（中の一）」『美術研究』、三六九号（一九九八年三月）。
- ・千葉慶「日本美術思想の帝国主義化―一九一〇～二〇年代の南画再評価をめぐる一考察」『美学』五四巻一号（二〇〇三年）。
- ・鶴田武良「民国期における全国規模の美術展覧会―近百年來中国絵画史研究一」『美術研究』三四九号（一九九一年三月）。
- ・中村義一「日本のモダニズムの誕生―『生の芸術』論争」、前掲『日本近代美術論争史』。
- ・中村義一「『白樺』近代主義の争点―『絵画の約束』論争」、前掲『続日本近代美術論争史』。
- ・中村義一「台展、鮮展と帝展」『京都教育大学紀要A人文・社会』七五号（京都教育大学、一九八九年九月）。
- ・中村義一「日本近代美術史における台湾―石川欽一郎と塩月桃甫」、前掲『石川欽一郎展』展覧会図録。
- ・永井隆則「印象派と日本―高村光太郎印象主義論」『美術フォーラム21』vol.7（二〇〇二年）。
- ・成瀬不二雄「江戸からパリへ―秋田蘭画から西洋近代絵画へ」『季刊芸術』四〇号（一九九七年）。
- ・西原大輔「日本の帝国美術ネットワークと地方色論」『日治時期台湾美術的「地域色彩」展論文集』（台中：国立台湾美術館、二〇〇四年）。
- ・野口玲一「カリキュラムとしての自画像とその変貌」、前掲『「洋画」の青春群像―油画の卒業制作と自画像』展覧会図録。

- ・羽田ジェシカ「台湾近代美術におけるアイデンティティ―陳澄波の『清流』（一九二九）を中心に」『九州中国会報』四九期（二〇一一年）。
- ・朴美貞「植民地朝鮮がどのように表象されたか―官展に入選した日本人画家の作品をめぐって」『美学』五四卷一期（二〇〇三年六月）。
- ・三浦篤「近代都市表象の行方―明治洋画と印象派の受容」『美術フォーラム21』vol.18（二〇〇八年）。
- ・椋棒哲也「郷土芸術・田園・地方色」『日本近代文学』七四（二〇〇六年五月）。
- ・山梨絵美子「陳澄波の画業に見る東アジア美術交流」『美術フォーラム21』vol.26（二〇一二年十一月）。
- ・李淑珠「陳澄波（一八九五―一九四七）とその時代―『私の家庭』における『プロレタリア絵画論』と『日本二重橋』」『美学』二二三号（二〇〇三年六月）。
- ・李淑珠「台湾ローカルカラーの戦時動員について」『美術史』一六一号（二〇〇六年十月）。
- ・廖瑾瑗著、李淑珠訳「台湾近代画壇の『ローカルカラー』―『台湾美術展覧会』東洋画部を中心に」、前掲『芸術／葛藤の現場―近代日本芸術思想のコンテキスト』。

（二） 中文

一 単行本

- ・嘉義市文化局主編『歲月―嘉義寫真』（嘉義：嘉義市文化局、一九九一年）。
- ・嘉義市文化局主編『嘉義寫真 第四輯』（嘉義：嘉義市文化局、二〇〇六年）。
- ・張景森『台灣現代城市規劃―一個政治經濟史的考察（一八九五―一九八八）』（台北：国立台湾大学土木工程所博士論文、

一九八四年)。

- 張炎憲ほか、インタビュー記録『嘉義驛前二二八』(台北：吳三連台灣史料基金會、一九九五年)。
- 陳蔓華編『獅吼——《雄獅美術》發展史口述訪談』(台北：國史館、二〇一〇年)。
- 蔣朝根編著『蔣渭水留真集』(台北：台北市文獻委員會、二〇〇六年)。
- 邱坤良『新劇與舊劇——日治時期台灣戲劇之研究(一八九五—一九四五)』(台北：自立晚報、一九九二年)。
- 周婉窈『日據時代臺灣議會設置請願運動』(台北：自立報系文化出版部、一九八九年)。
- 創價藝文中、心委員會編輯部編『阿里山之春——陳澄波與台灣美術史研究新論』(台北：勤宣文教基金會、二〇一三年)。
- 蕭瓊瑞主編『陳澄波全集第二卷 炭筆素描、水彩、膠彩、水墨、書法』(台北：藝術家、二〇一三年)。
- 蕭瓊瑞主編『陳澄波全集第三卷 淡彩速寫』(台北：藝術家、二〇一二年)。
- 蕭瓊瑞主編『陳澄波全集第五卷 速寫Ⅱ』(台北：藝術家、二〇一三年)。
- 蕭瓊瑞主編『陳澄波全集第八卷 收藏Ⅰ』(台北：藝術家、二〇一五年)。
- 蕭瓊瑞主編『陳澄波全集第九卷 收藏Ⅱ』(台北：藝術家、二〇一五年)。
- 黃瑩慧『真實與想像之間——郭雪湖《南街殷賑》的創作思維』(台南：成功大學藝術研究所修士論文、二〇〇七年)。
- 謝里法『日據時代台灣美術運動史』(台北：藝術家、一九九五年)。
- 黃琪惠『日治時期台灣傳統繪畫與近代美術潮流的衝擊』(台北：國立台灣大學藝術史研究所博士論文、二〇一二年)。
- 李欽賢『大地・牧歌・黃土水』(台北：雄獅圖書、一九九六年)。
- 李超編『狂飆激情——決瀾社及現代主義藝術先聲』(上海：上海錦繡文章出版社、二〇〇八年)。
- 廖瑾瑗『四季・彩妍・郭雪湖』(台北：雄獅圖書、二〇〇一年)。
- 林柏亭『清朝台灣繪畫之研究』(台北：中國文化大學修士論文、一九七一年)。
- 林柏亭『嘉義地區繪畫之研究』(台北：國立歷史博物館、一九九五年)。
- 林育淳『油彩・熱情・陳澄波』(台北：雄獅圖書、一九九八年)。

- 林麗雲『山谷聲音——台灣山岳美術圖像與呂基正』（台北：雄獅圖書，二〇〇四年）。
- 劉瑞寬『中國美術的現代化——美術期刊與美展活動的分析（一九一一—一九三七）』（北京：三聯書店）。
- 呂紹理『展示台灣——權力、空間與殖民統治的形象表述』（台北：麥田，二〇〇五年）。
- 若林正文、吳密察編『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』論文集（台北：傳播者文化有限公司，二〇〇四年）。
- 沈弘『西湖百象——美國傳教士甘博民國出年拍攝的杭州老照片』（山東：山東人民出版社，二〇一〇年）。
- 台灣新生報社編『台灣年鑑』（台北：台灣新生報社，一九四七年）。
- 王淑津『南國虹霓——鹽月桃甫藝術研究』（台北：國立台灣大學藝術史研究所修士論文，一九九七年）。
- 王乃信等訊『台灣總督府警察治革誌第二篇 領臺以後的治安狀況（中卷） 台灣社會運動史（一九一三—一九三六）第一冊文化運動』（台北：海峽學術出版社，二〇〇六年）。
- 吳三連、蔡培火、葉榮鐘、陳逢源、林柏壽『台灣民族運動史』（台北：自立晚報社文化出版部，一九七一年）。
- 顏娟英『台灣美術全集——陳澄波』（台北：藝術家，一九九二年）。
- 顏娟英編著『台灣近代美術大事年表』（台北：雄獅圖書，一九九八年）。
- 顏娟英識著、鶴田武良訳『風景·心境——台灣近代美術文獻導讀（上）（下）』（台北：雄獅圖書，二〇〇一年）。
- 顏娟英編『上海美術風雲——一八七二—一九四九申報藝術資料條目索引』（台北：中央研究院歷史語言研究所，二〇〇二年）。
- 顏娟英『水彩·紫瀾·石川欽一郎』（台北：雄獅圖書，二〇〇五年）。

二 展覽會圖錄

- 『陳澄波百年紀念展』（嘉義：嘉義市立文化中心，一九九四年）。
- 『陳澄波百年紀念展』（台北：台北市立美術館，一九九四年）。
- 『陳澄波廖繼春作品集 璀璨世紀』（台北：尊彩國際藝術有限公司，二〇一〇年）。

- 『澄海波瀾——陳澄波百二誕辰東亞巡迴大展台南首展』（台南：台南市政府，二〇一四年）。
- 『切切故鄉情——陳澄波紀念展』（高雄：高雄市立美術館，二〇一一年）。
- 『海上烟波——陳澄波藝術作品集』（上海：上海人民美術出版社，二〇一四年）。
- 『行過江南——陳澄波藝術探索歷程』（台北：台北市立美術館，二〇一二年）。
- 『日治時期台灣美術的「地域色彩」』（台中：國立台灣美術館，二〇〇四年）。
- 『南方艷陽——二〇世紀中國油畫名家 陳澄波』（北京：人民美術出版社，二〇一四年）。
- 『倪蔣懷百年紀念展』（基隆：基隆文化中心，一九九五年）。
- 『時代的優雅 郭雪湖百歲回顧展專輯』（台北：國立歷史博物館，二〇〇八年）。
- 『台灣東洋畫探源』（台北：台北市立美術館，二〇〇〇年）。
- 『再現澄波萬里——陳澄波作品保存修復特展』（高雄：正修科技大學藝術中心，二〇一二年）。
- 『藏鋒——陳澄波百二誕辰東亞巡迴大展台北』（嘉義：財團法人陳澄波文化基金會，二〇一四年）。

三 雜誌・單行本・論文集等收錄論文

- 並木真人「朝鮮的『殖民地近代性』、『殖民地公共性』和對日協力」、前掲『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』。
- 張正霖「日據時期台、府展東洋畫中之地方色彩論述——後殖民觀點的初探」『美麗新視界——台灣膠彩畫的歷史與時代意義學術研討會論文集』（台中：國立台灣美術館，二〇〇八年）。
- 張隆志「殖民現代性分析與台灣近代史研究——本土史學史與方法論芻議」、前掲『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』。
- 陳重光「我的父親陳澄波」、「陳澄波生平年表」『台灣美術家二學院中的素人畫家——陳澄波』（台北：雄獅圖書，一九七九年）。
- 陳芳明「殖民地社會的圖像政治——以台灣總督府時期的寫真為中心」『殖民地摩登——現代性與台灣史觀』（台北：麥田出版，

二〇〇四年）。

・吉田千鶴子「陳澄波と東京美術学校の教育」『檔案・顯像・新「視」界——陳澄波文物資料特展：學術論壇論文集』（嘉義：嘉義市政府文化局，二〇一一年）。

・江婉綾「家・國・童話——論陳澄波『嘉義公園』（一九三七）象徵意涵」『台灣美術』八二號（二〇一〇年十月）。

・蔣伯欣「作為方法的東洋——郭雪湖早期作品初探（一九二七—一九三一）」『台灣美術』七五期（二〇〇九年一月）。

・駒込武「台灣的『殖民地近代性』」、前掲『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』。

・邱函妮「界線內外——日治時期台北繪圖中的城市空間」『美學藝術學』第二期（二〇〇三年六月）。

・邱函妮「陳澄波『上海時期』之再檢討」、前掲『行過江南——陳澄波藝術探索歷程』。

・兒島薰「一九二〇—三〇年代日本油畫中對於『獨特性』的探究——在歐洲與亞洲之間」『國立台灣大學美術史研究集刊』三七期（二〇一四年九月）。

・傅瑋思「認同、混雜、現代性——陳澄波日據時期的繪畫」、前掲『行過江南——陳澄波藝術探索歷程』。

・蕭瓊瑞「在素樸與典雅之間——郭雪湖獨特的生命與畫風」『歷史文物』十八卷三期（二〇〇八年三月）。

・謝里法「台灣近代雕刻家的先驅者——黃土水」『雄獅美術』九八期（一九七九年四月）。

・謝里法「學院中的素人畫家陳澄波」『雄獅美術』一〇六期（一九七九年十二月）。

・謝里法「日治時代（一八九五—一九四五）台灣美術運動史」『藝術家』第一號（一九七五年六月）、第二號（一九七五年七月）、第三號（一九七五年八月）、第四號（一九七五年九月）、第五號（一九七五年十月）。

・謝里法「日據時代（一八九五—一九四五）台灣美術運動史」『藝術家』第六號（一九七五年十一月）、第七號（一九七五年十二月）、第八號（一九七六年一月）、第九號（一九七六年二月）、第十號（一九七六年三月）、第十一號（一九七六年四月）、第十二號（一九七六年五月）、第十三號（一九七六年六月）、第十四號（一九七六年七月）、第十五號（一九七六年八月）、第十六號（一九七六年九月）、第十七號（一九七六年十月）、第十八號（一九七六年十一月）、第十九號（一九七六年十二月）、第二〇號（一九七七年一月）、第二一號（一九七七年二月）、第二二號（一九七七年三月）、第二三號（一九七七年四月）、第

- 二四号（一九七七年五月）、第二五号（一九七七年六月）、第二六号（一九七七年七月）。
- 謝里法「郭雪湖——新美術運動裡的『台灣畫派』」『台灣出土人物誌』（台北：前衛，一九八八）。
- 謝世英「日治時期台灣美術的文化揉雜——陳進與潘春源的美人畫」『「島嶼風情」日治時期台灣美術之研究』（台中：國立台灣美術館，二〇〇八年）。
- 黃冬富「陳澄波畫風中的華夏美學意識——上海任教時期的發展契機」，前揭『檔案·顯像·新「視」界——陳澄波文物資料特展：學術論壇論文集』。
- 黃琪惠「陳澄波三幅畫作與藝術贊助」『故宮文物月刊』三八一号（二〇一四年十二月）。
- 黃瑩慧「真實與想像之間——郭雪湖《南街殷賑》的創作思維」『台灣美術』六七期（二〇〇七年一月）。
- 黃瑩慧「風景內外」『歷史文物』十八卷三期（二〇〇八年三月）。
- 郭雪湖「我初出畫壇」『台北文物』三卷四期（一九五五年三月）。
- 賴明珠「日治時期的『地方色彩』理念——以鹽月桃甫及石川欽一郎對『地方色彩』理念的詮釋與影響為例」『視覺藝術』第三期（二〇〇五年九月）。
- 藍適齊著、曾文亮記「超越民族想像——中國的台灣論述與民族論述」，前揭『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』。
- 李淑珠「把『台灣』畫出來」，楊儒賓編『人文百年化成天下——中華民國百年人文傳承大展』（新竹：國立清華大學，二〇一一年）。
- 李淑珠「陳澄波的『言』與『思』——以寄自東京的『家書明信片』為例」『台灣美術』八八期（二〇一二年四月）。
- 李淑珠「陳澄波的圖片收藏與陳澄波繪畫」『藝術學研究』第七期（二〇一〇年十一月）。
- 李淑珠「陳澄波與普羅美術」『台灣美術』八五期（二〇一一年七月）。
- 李淑珠「寫意與寫生——論陳澄波和莫內的『撐傘人物』」『台灣美術』七八号（二〇〇九年十月）。
- 廖瑾瑗「台展東洋畫部與『地方色彩』」『台灣美術百年回顧學術研討會論文集』（台中：國立台灣美術館，二〇〇一年）。
- 廖瑾瑗「台灣畫家郭雪湖的『在地』情懷（上）、（下）」『歷史文物』十八卷三、四期（二〇〇八年三月、四月）、一八二三

頁、四八—六三頁。

- 林柏亭「台灣東洋畫的興起與台、府展」『藝術學研究年報』第三期（台北：藝術家出版社、一九八九年三月）。
- 林柏亭「典雅與鄉土兼融——郭雪湖的膠彩世界」『台灣美術全集九 郭雪湖』（台北：藝術家、一九九三年）。
- 林育淳「發現自我——日治時期的自畫像」『何謂台灣？近代台灣美術與文化認同研討會會議論文集』（台北：國家圖書館、一九九六年九月十三日、十四日）。
- 林育淳「陳澄波生命之旅的現實地與桃花源圖像」、前揭『行過江南——陳澄波藝術探索歷程』展覽會圖錄。
- 鈴木惠可「邁向近代雕塑的路程——黃土水於日本早期學習歷程與創作發展」『雕塑研究』十四期（二〇一五年九月）。
- 呂采芷「終始於台灣——試探陳澄波上海期之意義」、前揭『行過江南——陳澄波藝術探索歷程』展覽會圖錄。
- 盛鎧「《圓山附近》與《南街殷賑》中的審美意識和空間意涵——郭雪湖畫藝的現代性」『台灣美術』七五期（二〇〇九年一月）。
- 松本武祝「有關朝鮮『殖民地近代性』論點之整理與重建」、前揭『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』論文集。
- 王白淵「台灣美術運動史」『台北文物』三卷四期（一九五五年五月）。
- 王秀雄『台灣美術全集十九 黃土水』（台北：藝術家、一九九六年）。
- 王淑津「日本殖民地時代台灣美術史的『地方色彩』論題」『今藝術』一二六期（二〇〇三年三月）。
- 吳叡人「台灣非是台灣人的台灣不可——反殖民鬥爭與台灣人民族國家的論述 一九一九—一九三二」、林佳龍、鄭永年主編『民族主義與兩岸關係哈佛大學東西方學者的對話 台灣研究基金會叢書二之六』（台北：新自然主義公司出版、二〇〇一年四月）。
- 吳叡人「福爾摩沙意識形態——試論日本殖民統治下台灣民族運動『民族文化』論述的形成（一九一九—一九三七）」『新史學』一七卷二期（二〇〇六年六月）。
- 楊永源「石川欽一郎台灣風景畫中『地方色彩』概念的建構」『藝術學研究』第三期（二〇〇八年五月）。
- 顏娟英「台灣早期西洋美術的發展（一）、（二）、（三）」『藝術家』一六八期（一九八九年五月）、一六九期（一九八九年六月）、一七〇期（一九八九年七月）。
- 顏娟英「勇者的畫像——陳澄波」『台灣美術全集一 陳澄波』（台北：藝術家出版社、一九九二年）。

- 顏娟英「陳澄波繪畫風格的形成」、前揭『陳澄波百年紀念展』（台北市立美術館）。
- 顏娟英「台展東洋畫地方色彩的回顧」、前揭『風景心境——台灣近代美術文獻導讀（上）』。
- 顏娟英「營造南國美術殿堂——台灣展傳奇」、前揭『風景心境——台灣近代美術文獻導讀（上）』。
- 顏娟英「徘徊在現代藝術與民族意識之間——台灣近代美術史先驅黃土水」、前揭『台灣近代美術大事年表』。
- 顏娟英「近代台灣風景觀的建構」、『國立台灣大學美術史研究集刊』第九期（二〇〇〇年九月）。
- 顏娟英「百家爭鳴的評論界」、顏娟英著、前揭『風景心境——台灣近代美術文獻導讀（上）』。
- 顏娟英「官方美術文化空間的比較——一九二七年台灣美術展覽會與一九二九年上海全國美術展覽會」、『中央研究院歷史言語研究所集刊』第七三本第四分（二〇〇二年十二月）。
- 顏娟英「自畫像、家族像與文化認同問題——試析日治時期三位畫家」、『藝術學研究』七期（二〇一〇年十一月）。
- 葉思芬「英雄出少年——天才畫家陳植棋」、『台灣美術全集十四 陳植棋』（台北：藝術家出版社、一九九五年）。

論文の内容の要旨

論文題目 「故郷」の表象—日本統治期における台湾美術の研究—

氏 名 邱 函妮

本論文では、日本帝国が植民地台湾に導入した「美術」の制度と概念を検討することによって、「美術」における「台湾」概念とその表象の成立について、制度・概念・言説・作品などの側面から考察した。また、「台湾的」表象を分析する際、「故郷」という観点を導入し、台湾人芸術家らの「台湾人」としてのアイデンティティの問題を考慮した。

前半では、主に制度史的観点から分析を行った。「台湾美術」という枠組みは、植民地統治下において、「美術」の概念と制度が台湾に移植された過程から形成されたとも言えるからである。特に台展を中心とした日本統治期における台湾画壇では、独自性のある「台湾美術」を創造しようとする「地方色（ローカル・カラー）」の表現は、その最も中心的な概念だった。本論は先行研究とは異なる視点から、植民地美術展覧会における「ローカル・カラー」という問題を考察した。つまり、台展における「ローカル・カラー」の概念は、西洋的近代性を普遍的な価値基準としたときに、それと対照されて現れる独自性（「地方性」）であると、筆者は考える。「地方性」あるいは「地方文化」は、植民地だけに存在したのではない。西洋的近代性を価値基準とするとき、日本自身もその独自性、すなわち日本の「ローカル・カラー」が現れてくるのである。つまり、芸術家たちはまず自分を近代西洋美術の枠の中に置いてから、翻って自らの文化の独自性を表現し得る素材を探さなければならなかった。

美術における独自性の追求という考え方は、絵画制作の面にまで影響を及ぼした。日本内地からの審査員が、次々と台展や朝鮮美展で「ローカル・カラー」の表現を要求したのは、日本画壇における独自性の追求という傾向に関係があったと考えられる。だが、日本内地からの審査員がこうした「ローカル・カラー」の表現を要求する一方で、台湾在住の日本人審査員は必ずしもこれに同調したわけではない。展覧会における台湾を主題とした作品は、「ローカル・カラー」の方針に応じて生まれたものであると、先行研究ではよく指摘されてきた。けれども、台展審査員や評論家の発言を検討すると、台湾的特色を表現するには、日本と異なる独特な主題を採用するだけでなく、日本の画壇とは異なる画風を作り出すことが重要でもあったことがわかる。つまり、「ローカル・カラー」の問題を考える際、主題だけでなく、その様式をも考慮に入れる必要がある。台湾に移植された西洋画と東洋画というジャンルには、「台湾」を描写する様式や図式（schema）の伝統が乏しかったため、台湾の独特な題材を取り上げても、独自性を示す画風を創造することは決して容易ではなかった。

また、台展において「ローカル・カラー」を表現するという方針には、新しい郷土芸術を創造せよという要請が含まれていた。台湾を郷土として認識した上で、この土地に根ざす「内台融合」の新しい郷土芸術を生み出そうという展覧会の方針は、統治者側による同化政策の一部であると言えるが、台湾人にとって、台湾の独自性を追求することは、かえって彼らの共同体意識を集結させるものであった。つまり、台湾人による「台湾的」主題の作品には、個人・共同体の心情、アイデンティティとが相互に繋がっており、その中には作者の「故郷」意識が吐露されると同時に、「フォルモサ芸術」を創造しようという意識も見られたのである。

郷土の風物を題材として取り上げることは、台展に始まったものではなかった。台湾人の芸術家はもっと早い段階で台湾を「故郷」として認識し、「故郷」を創作の題材にした。このような例として、論文の後半では、台湾人芸術家が帝展、台展などの展覧会に出品した作品を取り上げ、「故郷」という観点から、彼らの「台湾人」としてのアイデンティティの問題を考察した。

第3章では、まず、黄土水が制作した《水牛シリーズ》の作品を取り上げた。植民地の芸術家であった黄土水は、帝展に参加するとき、次の2点が創作活動の重要な目標だった。それは、「台湾」を表現すること、そして台湾を「未開地」と見る日本人の印象を、「美しい島」台湾として変えさせることである。しかし、題材であれ、様式であれ、彫刻によって「台湾」を表現しようとする前例が全くなかったため、黄土水は、日本人が構築した台湾のイメージの中から、先住民や水牛等の題材を探さなければならなかった。その一方で、これらの題材に含まれる未開かつ野蛮なイメージは、彼にアイデンティティの危機感をもたらした。その結果、黄土水は日本人が作った台湾のイメージを受け入れると同時に、自身のアイデンティティを脅かす要素を払拭することによって、自己アイデンティティを再構築し、新しい「故郷」としての台湾像を創造したと言える。

続いて郭雪湖《南街殷賑》及び陳植棋《真人廟》を例として、「故郷」をどのように絵画化するのかという問題を考察した。台北の大稻埕から取材したこの2点の作品は、台湾人が「近代化」を自分たちの問題とし、自分たちの町を通じてそれを描こうとする姿勢が見られる。そこには、画家それぞれの故郷意識が吐露されていると言えるだろう。この2点は、明らかに台湾の「ローカル・カラー」を表現意識を持っていたため、台展における郷土芸術に関する表現を分析するには格好の例と言えるが、これらを単に展覧会の「ローカル・カラー」表現の方針に従った産物と考えるべきではない。台展当局が設定した方針を超える個人意識と、創作者自身のアイデンティティの葛藤が、そこには認められるのである。

第4章では、続いて「故郷」という観点から、陳澄波が異なる時期に「故郷」嘉義を描いた作品3点を考察した。東京留学中に描いた作品、《嘉義の町はずれ》(1926年)と《街頭の夏気分》(1927年)、帰郷後に制作した《嘉義公園》(1937年)である。

陳澄波が東京留学中に描いた作品は、彼が「故郷」を離れ、異郷に生活するなかで訪れた、

アイデンティティの危機意識の下に生まれたものとも言える。《嘉義の町はずれ》と《街道の夏気分》という2点の帝展出品には、自然と文明とが拮抗する構造から、南国の自然が近代文明に制御される構造へと変化していった過程が読み取れる。陳澄波が帝国の首都で展示したこの2点の作品は、彼の「故郷」意識の形成とも強く関わっていた。彼は、日本人の視線の下に成立した「台湾」のイメージの中から、自身の存在感を脅かす要素（「台湾」＝前近代的とする偏見）を払拭することによって、自らのアイデンティティを再構築したのである。

帰郷後の代表作である《嘉義公園》品を創作する際、陳澄波は様々な東アジア絵画の要素を画面に取り入れようとした。このような試みは、彼が1932年頃から、絶えず「東洋人」のアイデンティティを強調し、作品に所謂「東洋的気分」を表現しようとしていたことと関連していると考えられる。陳澄波の創作における意識とその時代的背景について、「東洋」というキーワードを手がかりに考察するならば、《嘉義公園》は、台湾、日本、東洋、西洋の記号がひとつの画面内で融合されることで、嘉義が理想的な「故郷」の風景として表象されたものだといえる。また、南画的な手法で描かれた《嘉義公園》の鳳凰木は、「南国」の異国情緒を薄め、鑑賞者に樹木の持つ強い生命力と、画家自身の精神や創造力を伝えようとしたものではないだろうか。

つまり、陳澄波は「故郷」の風景を描くという行為によって、「自己」のイメージとアイデンティティを再構築した。これらの「故郷」の風景は、画家の一種の「自画像」とも言えるであろう。陳澄波が1930年代前半に絶えず「東洋」のアイデンティティを強調したことは、彼がアジア文化の深部から、主体性を求めようとしたことを示しているだろう。さらに、この理想的な「故郷」の風景を通して、文化的な面において主体性を追求する可能性を大衆に伝えようとしたのであると筆者は考える。

第5章では、様式の観点から、「台湾」という概念がどのように絵画化されたのかという問題を、陳澄波と陳植棋の作品を取り上げて考察した。東京に留学していたふたりは、複製図版を通じてポスト印象派絵画と出会った。ポスト印象派は、東アジアにおける伝播の過程で、絵画様式上の影響を与えただけでなく、芸術が自己の内面を探究する方法として受け入れられ、人々に芸術家としての意識を形成していくことを促した。本章では、近代台湾における芸術家の形成という問題を考察するために、近代日本におけるポスト印象派の受容の歴史と、それが陳澄波と陳植棋における芸術家意識と芸術観の形成にどのように関連したかを考察し、さらに「写真」と「表現」という角度から、陳澄波と陳植棋の絵画様式を分析した。

ポスト印象派を受容することで「自己表現」が彼らの創作の目標のひとつになったという認識は、故郷台湾の風景を描いた彼らの作品を考察する時、重要であろう。なぜなら、彼らにとって、「主観」と「自己」から出発しなければ、本当の意味での「自己」の台湾風景を作り出すことはできなかったからである。

このように、本論文では、日本帝国が植民地統治の文化政策として台湾に導入した「美術」制度を検討したが、美術制度の移植を、統治者が植民地に対して一方的に「文明化」を施行した結果と見なすのではなく、被統治者としての台湾人が、この美術制度に参加するとき、直面した困難や問題が何だったのかをも考察してきた。近代性の追求と地方色の表現とのはざまの中で、台湾人芸術家のなかに自らのアイデンティティと「台湾」とを繋ぐ「故郷」意識が発生した。しかし、それらの作品には、それぞれ異なる立場や考え方を持つ芸術家による「台湾的」主題の表現の複雑さと、多層的な意味がともに見て取れるであろう。